

京都大学	博士（文学）	氏名	岡村 弘樹
論文題目	古代語上一段活用の研究		
<p>（論文内容の要旨）</p> <p>本論文は、古代における上一段活用の形態、及び上一段活用と他の活用との関わりについて論ずるものである。</p> <p>上一段活用は、下一段活用が成立するまでは母音変化を伴わない唯一の活用であり、古代にはその所属動詞が十語あまりしか見られないなど、特徴的な活用である。しかし、その語数の少なさのためか、あるいはその特殊さが扱いにくいいためか、未解決の問題が多く残されている。本論文はその解決に資する議論を展開することを目指すものである。</p> <p>本論文は二部より成る。</p> <p>第Ⅰ部では上一段活用の形態について考察する。第一章では上代における動詞ミル（見）の終止形の形態を検討し、その結果を承けて第二章では古代における上一段活用全体を扱う。第三章では上一段活用と関係するかもしれない動詞としてホル（欲）を取り上げる。</p> <p>第Ⅱ部では上一段活用と関係の深い他の活用について検討する。第一章では主に下一段活用を、第二章では主に上二段活用を取り上げる。</p> <p>第Ⅰ部「古代における上一段活用の形態」</p> <p>第一章「ミル（見）の形態」は動詞ミルの終止形の形態を取り上げるものであり、本論文の中心となるものである。上代において、終止形接続の助動詞ベシやラムが動詞ミルに下接すると、ミルベシやミルラムではなくミベシやミラムといった形態を取ることが知られている。このときのミという形態に関する解釈については諸説あるが、動詞ミルが上代において最も頻用された動詞の一つであるにもかかわらずミルという語形の終止形が上代に一例も見られないことから、ベシやラムが下接したミという語形こそが上代における動詞ミルの終止形であると主張した。</p> <p>終止形といっても、終止形接続の助動詞という下接法からみた場合に、ミという語形に下接しているのに過ぎないという可能性も考えられる。相対的に所属動詞が少ない上一段活用の特徴とも見なし得るからである。しかしながら、終止形に下接する助動詞トモが下接したミトモという例が複数見られること、さらに訓みに諸説ある『万葉集』二五七五番歌の第二句「君乎見常衣」の解釈において終止法の終止形ミを想定してキミヲミトコソと訓む方がより整合的な解釈になることから、助動詞の下接法とも</p>			

あわせて、体系的に終止法の終止形もミという語形であったと考えられる。なお、一般的には命令形ミが使われていると解釈される二七番歌の第五句「良人四来三」についても、終止形ミが用いられている可能性を考える必要があることを指摘した。

第二章「上一段動詞の分類」では、古代における上一段動詞全体を扱う。上一段動詞には元から上一段活用であった動詞と上二段活用由来の動詞とが混在しているといわれるため、前者を第一種上一段動詞、後者を第二種上一段動詞と呼び分けてそれぞれに分類することを目指した。上一段動詞と上二段動詞を比較すると、形態上二点の相違点が指摘できる。一点目は、上一段動詞の終止形末尾はイ段音であるが上二段動詞の終止形末尾はウ段音であること、二点目は、上一段活用からの派生語は接尾辞直前がイ段音やエ段音（甲類）となるが上二段活用からの派生語は接尾辞直前がウ段音やオ段音（乙類）になりやすいことである。以上二点の相違点に基づき分類した結果、古代における上一段動詞は以下のように分類された。

(イ) 第一種上一段動詞

キル（着）・ニル（煮）・ミル（見）・イル（射）・イサチル（泣）

(ロ) 第二種上一段動詞

ニル（似）・ヒル（干）・ヒル（嚏）・ヒル（簸）・ミル（廻）・
キル（居）・アラビル（荒）

(ハ) いずれに分類するか不明な上一段動詞

イル（鑄）・イル（沃）・キル（率）

中でも、ニル（煮）の終止形ニと見られる用例が『新訳華嚴経音義私記』と享和本以外の『新撰字鏡』諸本に見られるという指摘と、ニル（似）と四段動詞ノル（似）の派生関係を考えるにあたって共通の派生元となる上二段動詞ヌが想定されるという主張は、先行研究に見られないものである。また、ニという語形のニル（煮）の終止形が見出されたことにより、第一章で考察した内容が動詞ミル（見）に留まるものではなく、第一種上一段動詞全体に当てはめられるものであることを確認した。

第三章「ホル（欲）の活用」は、四段活用と考えるには不自然な例が多いホルの活用を検討したものである。ホルは『日本書紀』歌謡では連体形ホルという例が見られるが、『万葉集』ではホリという形態のみが見られる。このホリは一見すると連用形かと思われるが、引用の助詞トを下接したホリト、和歌の末尾に置かれるホリ、活用語の連体形や已然形に下接する助詞カモを下接したホリカモといった独自の用例が見られ、これらのホリは四段動詞の連用形の用例とは考えがたい。

ホルは『万葉集』編纂時の奈良時代後期には既に歌謡や和歌において用いられる動詞になっていたと見られ、むしろ前時代的な古態を留めていると見た方が良い。そこで、第一章、第二章で検討してきた上一段活用の形態よりもう一段階古い上一段活用の形態を考え、かつてはいずれの活用形においても語尾にルやレを伴わず-iという形態であったと想定した。動詞ホルの活用を古い形態の上一段活用と考えれば、ホルの独自の用法についても説明を加えることができる。

一般的に上一段活用には単音節動詞しか属しないとされるが、ホルの活用が上一段活用であったと認められるならば、かつて上一段活用には多音節動詞も属していたということになる。しかし多音節の語幹を持つ上一段動詞は、語幹の末尾が活用語尾と認識されるようになり、四段活用や上二段活用に転じることがある。そのために古代における上一段動詞は単音節動詞ばかりであったという可能性が考えられる。

第Ⅱ部「上一段活用の周辺」

第一章「二段活用の一段化」開始時期と下一段活用の成立」では、オク（起、上二段）→オキル（上一段）やウク（受、下二段）→ウケル（下一段）のような「二段活用の一段化」の現象は単音節動詞から始まったことが知られるが、上二段活用の一段化と下二段活用の一段化とでその開始時期が数百年隔たっている原因について検討した。

「二段活用の一段化」とは、二段活用が一段活用と同じ形態になる現象であると一般的には認識されている。しかし、第Ⅰ部で検討したように上代における上一段活用の終止形末尾がイ段音であったと考えると、上二段活用が一段化する際に終止形がいかなる形態を取ったかが問題となる。終止形末尾がイ段音である動詞は上一段動詞とラ変動詞に限られ、動詞の多くの終止形末尾はウ段音であった。上二段動詞についても同様であるが、元々ウ段音で終止していた動詞が、一段化による語幹の安定を優先させてイ段音での終止に転じたとは考えがたい。終止形の形態は既存の上一段動詞と異なる-iルという形態を取っただろう。単音節上二段動詞の一段化とは、全ての活用形において語幹がイ段音で安定している既存の上一段活用を契機としつつも、終止形が-iルという形態である新生の上一段活用を創り出した文法現象であったと考えられる。

一方、既存の上一段活用と対になるような形態の下一段活用、すなわち終止形末尾がエ段音である下一段活用というのは存在しなかった。それは、文の末尾というのはイ段音かウ段音で結ばれるのが通常であり、エ段音での終止というのは何らかの意味をもつ有標なものであると認識されたためであろう。上一段活用の一段化が開始される際には既存の上一段活用がその契機となったが、既存の下一段活用と呼び得るような下一段活用は存在しなかったため、単音節下二段動詞には一段化の契機となる活用

がなかった。そのために下二段活用の一段化は上二段活用と同時期には開始されなかったのである。平安時代初期に単音節上二段活用の一段化が完了し、既存の上一段活用も新生の上一段活用に合流し、新生の上一段活用の使用頻度、所属語数ともにある程度充実して初めて、そこからの類推により単音節下二段動詞の一段化は開始されたのだろう。

第二章「上二段活用と他活用との関わり」では、上一段活用と関係の深い上二段活用について、他活用との関わりを中心に検討した。

本章ではまず、上代における自他対応形式を取り扱った。釘貫亨『古代日本語の形態変化』（1996）によると、自他対応形式は第Ⅰ群：ウク（浮、四段自動詞）—ウク（下二段他動詞）のような活用の種類による自他対応、第Ⅱ群：ナル（成、自動詞）—ナス（他動詞）のような語尾による自他対応、第Ⅲ群：アル（荒、自動詞）—アラス（他動詞）のような語幹の増加と語尾付接による自他派生の三種類に分けられる。これを活用という観点から一貫して観察すると、第Ⅰ群は専ら四段動詞の下二段化により自動詞／他動詞を派生した形式、第Ⅱ群はル語尾四段動詞とス語尾四段動詞の組に偏る形式、第Ⅲ群は上・下二段動詞に語尾ル／ス（いずれも四段活用）を付加した組に偏る形式と捉え直すことができる。特に第Ⅰ群形式と第Ⅲ群形式は、四段→下二段、上・下二段→四段という対となる形式であるといえよう。

ところが、上二段動詞はそのほとんどが自動詞であるといわれるが、そうした特徴を持つにもかかわらず自他対応形式にはほとんど関わっていない。この点については、四段動詞連用形と上二段動詞連用形の形態が関係していると見られる。動詞において連用形は最も頻用される活用形であり、活用の違いで自他の違いを表すにはまず連用形の形態が明確に異なることが重要であっただろう。しかし四段動詞連用形と上二段動詞連用形は、上代特殊仮名遣いの甲乙の違いがあったものの、その両者による掛詞が成立した例が見られるほどに類似した音であった。そのために四段→上二段という自動詞派生は成立せず、上二段動詞は自他対応形式にあまり関わるできなかったのだと考えられる。

続いて、中古以降において上二段活用と四段活用との間で揺れが見られる動詞を取り上げた。活用に揺れが見られる動詞の中にはバ行動詞が多い、上二段動詞の自動詞的意味に基づく活用の出入りが見られるといった先行研究の指摘があるが、その他に四段活用の中で最も多いラ行動詞の例が少なく、一方で四段活用の中で最も少ないタ行動詞の例が多いことが指摘できる。上二段動詞の意味を損なわない範囲という条件に加え、上二段動詞らしい語尾（バ行）や四段動詞らしくない語尾（タ行）が活用の揺れに関わりやすかったらしい。

また、この語尾に見られる傾向は、鎌倉時代から室町時代にかけて新しく造られた

上二段動詞にも見られる。上二段動詞は四段動詞や下二段動詞と比べて語数が少ないため、新たに造られる動詞のほとんどが四段活用か下二段活用であるが、中世にはわずかに新たに造られた上二段動詞が見られる。新しい上二段動詞のほとんどは元々上二段動詞に突出して多いバ行動詞であるが、それを除くと、イコヅ、コヅ、シビツ、シヤツの四語に限られる。ダ行動詞は四段活用にはないためイコヅとコヅは上二段動詞として成立したと考えられ、シビツとシヤツは、四段活用にタ行動詞が少なく、かついずれの動詞も上二段活用の自動詞的性格に合致するものであったために上二段動詞として成立したのだと考えられる。

(論文審査の結果の要旨)

上一段活用は、上代において母音変化を伴わない唯一の活用であり、所属動詞が十語あまりしか見られないなど、特徴を持つ活用である。上一段動詞は、語数の少なさや特殊性から、従来の研究で正面から取り上げられることが少なかった。本論文は、古代日本語における上一段活用の形態、ならびに上一段活用と他の活用との関わりについて考察している。

本論文の第Ⅰ部では上一段活用の活用形態について考察している。第一章では上代における上一段動詞ミル（見）の終止形の形態を検討し、第二章では古代における上一段動詞全体を分類する。第三章では上一段活用と関係する可能性のある動詞としてホル（欲）を取り上げる。第Ⅱ部では上一段活用と関係の深い他の活用について検討し、第一章では主に下一段活用を、第二章では主に上二段活用を取り上げている。

第Ⅰ部第一章「ミル（見）の形態」は動詞ミルの終止形の形態を取り上げる。古典文法における上一段動詞ミルの活用は「ミ・ミ・ミル・ミル・ミレ・ミ（ヨ）」であり、終止形はミルである。しかし、万葉集をはじめとする上代の資料では、終止形接続の助動詞や助詞につながる際、ミルの形は現れない。後世ミルベシとなるものがミベシの形で、ミルラムがミラム、ミルトモがミトモのようなミの形で現れる。加えて、文末に現れる裸の終止形としてもミルは一例も見られないことを指摘し、上代における「見」の終止形はミであったと主張する。用例数の最も多い「見」を中心に論じるが、上一段動詞全体でも終止形「-iル」を上代では確認できないことから、上一段活用の終止形は「-i」であったと結論づける。用例の博搜によって終止形ミを確定し、それを活用の中に位置付ける論は明解で、学界に大きなインパクトを与えた。本論文はこの発見を核に展開していく。

上代特殊仮名遣の別などから、上一段動詞には、元から上一段であったものと上二段から上一段に転じたものとが混在していることが知られている。第二章「上一段動詞の分類」では、上一段動詞全体について、元来の上一段動詞（第一種上一段動詞）と上二段から転じた動詞（第二種上一段動詞）とに分類する。分類の過程で、ニル（煮）の終止形ニの用例を報告し、ニル（似）の古形として上二段動詞ヌを想定するなど、個々の動詞に関わる新知見も多く見られる。音韻形態に着目して分類する柔軟な発想と、用例の精緻な検討という手堅い手法とがあいまった好論である。この分類によって、本来の上一段動詞を一覧することが可能になり、今後の研究の基礎とできる。

第三章「ホル（欲）の活用」は、四段活用と考えるには不自然な点が多いホルの活用を検討し、より古い上一段活用の姿を推定する。第一章と同様、例外として扱われがちな現象に着目することで古形を再建し、再建された古形によって現象を統一的に説明しようとする。

第Ⅱ部は上一段活用の周辺を扱っている。同じ二段活用でありながら、上二段と下二段とでは「二段活用の一段化」の開始時期が大きく異なる。下二段の一段化の開始

は上二段のそれよりも数百年遅れている。第Ⅱ部第一章「二段活用の一段化」開始時期と下二段活用の成立」はこの問題を扱い、上二段には上二段が古くから存在したのに対し、下二段には一段化の契機となる下二段が存在しなかったことが原因だと述べる。また、上二段の一段化によって生まれた活用と元来の上二段活用とは、ある時期まで終止形が異なっていたとする点も、古代日本語の活用体系を解明する上で重要な指摘である。一段化という日本語の通時変化の重要課題に取り組み、扱う時代を中世まで拡げている。

第Ⅱ部第二章「上二段活用と他活用との関わり」では、上二段活用と関係の深い上二段活用について、自動詞・他動詞の問題も含め、他活用との関わりを中心に検討しており、今後の当該分野の研究につながるヒントが多くちりばめられている。

このように、本論文は、ミルという形の終止形が上代の資料において一例も見当たらないというきわめて重要な指摘を出発点に、上二段動詞、さらには二段動詞の一段化をめぐって、広く深い考察を行っている。

古代日本語の動詞研究は、所属語数の多い四段動詞と下二段動詞を中心に行われ、一段動詞については補助的に扱われることが多かった。母音交替によって活用を構成する四段活用に対して、一段活用は母音交替をまったく行わない活用体系である。二段動詞の一段化によって、現在、一段動詞は五段動詞とならんで動詞の中心となっている。一段活用の原形たる上二段活用について考えることは、日本語の活用の意味と機能を解明する上できわめて重要である。本論文は、関連する諸問題について考えさせるところの多い、喚起力に富む論として高く評価できる。

一方、課題も残されている。上二段活用とは一体何のために存在する、どのような特徴を持った動詞群なのかという、もっとも根本的な問題が未解決のままである。上二段活用の終止形が古く「-i」であったという仮説は、説得力があり魅力的なものだが、未然・連用・終止が同形の活用は他になく、それを「活用」と呼べるかどうかとも疑問である。本論文全体が、その終止形「-i」仮説にもとづいて様々な事象を説明するという形で展開されているための危うさもある。ただし、これらの問題点は、本論文の扱うテーマが根源的であること、本研究の射程がきわめて広いことを同時に示していよう。論者の今後の研鑽によって、これらの問題が克服されることを期待したい。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。平成31年1月8日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当分の間、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。